

## 李盛鐸舊藏寫本《驛程記》初探\*

高田時雄

### はじめに

李盛鐸舊藏の敦煌寫本中に《驛程記》と題される斷簡があることは、それが李氏所藏の敦煌寫本目録に登載されていることで早くから知られていた<sup>1</sup>。その李盛鐸所藏敦煌寫本 432 點は、昭和十一年（1936）にすべてがその息李滂から書畫商白堅の手を経て日本にもたらされ、京都大學の羽田亨の手に歸した<sup>2</sup>。さらに第二次大戰末期に、戦火を避けて出資者たる武田家に移され、1980 年代初めに武田科學振興財團杏雨書屋の所藏となったが、これまで長く公開されなかったため、この斷簡を正面から取り上げた研究は皆無に等しい。幸い羽田が自分の研究用に撮影しておいた寫眞が京都大學文學部に所藏されており、その寫眞によって簡単な報告が爲されたことはあるが<sup>3</sup>、ほとんど存在の指摘だけに止まったのはやむを得ない。しかし昨年（2009 年）三月に『杏雨書屋藏 敦煌秘笈 目録冊』が刊行されたのを皮切りに、『影片冊』一、二<sup>4</sup>が相次いで出版されたことで、百年の沈黙を経て李盛鐸舊藏敦煌寫本の全貌が明らかになるろうとしている。小文では、その中から新たに公開された《驛程記》のテキストを取り上げ、若干の關連する問題について言及したいと思う。

---

\*本稿は日本學術振興會科學研究費補助金「ロシアに所藏される敦煌吐魯番等發見漢文文獻の研究」（基盤研究 B、研究代表者：高田時雄）による研究成果の一部である。また小文の初稿を研究班の例會において発表した際には、辻正博、岩尾一史の兩氏をはじめ班員諸兄から貴重な意見を頂戴した。ここに記して感謝したい。

<sup>1</sup>目録のうちもっとも見易いものとして王重民『敦煌遺書總目索引』第四「敦煌遺書散録」の一として掲げられる「李氏鑒藏燉煌寫本目録」があり、該斷簡はその 0221 番に見える。

<sup>2</sup>詳細については拙文「李滂と白堅——李盛鐸舊藏敦煌寫本日本流入の背景」『敦煌寫本研究年報』創刊號（2007 年 3 月）1-26 頁を参照。

<sup>3</sup>榮新江「追尋最後の寶藏——李盛鐸舊藏敦煌文獻調查期」、劉進寶・高田時雄主編『轉型期的敦煌學』（上海古籍出版社、2007 年 11 月）、15-32 頁。

<sup>4</sup>それぞれ 2009 年 10 月、2010 年 3 月、財團法人武田科學振興財團刊。

## 一、寫本學的所見とテキスト

さて《驛程記》は李氏舊藏寫本中の32番、上記『影片冊』一の229頁に、卷子の外形及び寫本本文のカラー寫眞が収録されている。首尾缺の小斷片で、10行を存する。目録の計測に従えば、殘紙は高30.7cm、殘存部の最大幅は17.6cmである。天地及び各行に界線を施し、界高は25.2cm、毎行の幅1.7cmで、一行に22字乃至23字が書かれる。文字は楷書で時に行書を交えるが、非常に丁寧に書かれた寫本で、精鈔本と稱してもよいほどである。用紙は、これも目録に據れば、粗惡な厚紙で、色は青白椽（あおしろつるばみ）色だとされる<sup>5</sup>。二箇所、第二行と第十行に白文の小印「李盛鐸印」が鈐されている<sup>6</sup>。

殘存テキストは以下の通り。便宜上、行程の日付によって改行する。[ ]で囲んだ箇所は缺損部（及びそれを補ったもの）、また小さなアラビア數字は原寫本の行數を示す。

- 1 [十六日] 至谷南口宿
- 十七日 [.....]
- [十八日] 2 至西受降城宿
- 十九日 西城歇
- 3 廿日 發至四曲堡下宿
- 廿一日 發至吳懷堡宿
- 廿三日 發 4 至天德軍城南館宿
- 廿四日 天德打毬設沙州專使至
- 九 5 月三日 發天德發至麥泊食宿
- 四日 發至曲河宿
- 五日 發 6 至中受降城宿
- 六日 發至神山關宿
- 七日 雲迦關宿
- 八日 歇
- 7 九日 發至長平驛宿
- 十日 發至寧人驛宿

<sup>5</sup>目録では用紙の色彩を表現するのに日本の傳統的な色名を用いているが、どれほど正確に原寫本の色相を復元し得るかは疑問である。現在では圖録が刊行され、そのカラー圖版を参照できる。印刷の加減もあり、原寫本とは色相に若干の相違があり得ようが、紙色についてはやはりカラー圖版を見るのがよいと思われる。

<sup>6</sup>白文の「李盛鐸印」は大きさの異なる大中小三種類が知られているが、これはその中で最小のものである。

十一日 發子 8 河驛宿  
十二日 發至振武宿  
十三日 發長慶驛宿  
9 十四日 發至靜邊軍宿  
十五日 紇藥驛宿  
十六日 平番驛 10 宿  
十七日 天寧驛宿  
十八日 鴈門關北口驛宿  
十九日 [.....]

## 二、五臺山巡禮と敦煌

五臺山は文殊菩薩が顯現する東方の聖地として、アジア諸民族の尊崇をあつめ、古來ここに巡禮する僧俗はきわめて多い。傳説では後漢の明帝の時代、迦葉摩騰と竺法蘭が中國に來たり、洛陽に白馬寺を建てた時、天眼を以て五臺山が文殊菩薩が住し佛舍利塔の備わった聖地であると看破し、明帝に寺院の建立を奏請した。山のかたちがインドの靈鷲峯に似ているというので、この寺院は大孚靈鷲寺と命名された<sup>7</sup>。これが五臺山最大の伽藍を誇る顯通寺の起源だという。もとより後世の附會であって信ずるに足りないが、北魏の孝文帝がそれを再建し、靈鷲の周りに十二院を置き、花園寺と名付けた<sup>8</sup>というのは、龍門石窟を造營した崇佛の天子であるだけに、やや信用を置くことができる。

唐代には西域との交通が一層頻繁になったこともあって、インドからこの地に詣でる僧も出現する。『古清涼傳』は<sup>9</sup>、唐の麟徳年間（664-666）に中國に來て、五臺山に詣でた梵僧釋迦蜜多羅（Śākyamitra）のことを傳えている。この僧はスリランカの出身であったが、マガダ國の大菩提寺に住んでいたという。五臺山に赴き、文殊菩薩を拜したいというので、朝廷ではそれを許し、漢語を解しない釋迦蜜多羅のために鴻臚寺の掌客を遣して譯語人とした。涼州から智才という僧が付き添って世話をしていたと云うから、恐らくはインドから陸路を辿って來たのであろう。

<sup>7</sup> 『清涼山志』卷二（民國 22 年排印本）第 15 頁。この傳説そのものは唐の麟徳元年（664）の『道宣律師感通錄』（『大正藏』第 52 冊、437 頁）や、宋の妙濟大師延一の『廣清涼傳』（『大正藏』第 51 冊、1107 頁）にも見えているので、かなり早くから存在はしていたのである。

<sup>8</sup> 上掲『清涼山志』卷二、第 15 頁。北魏の孝文帝が創建したという説は、唐の慧祥『古清涼傳』に見える（ここでは大孚圖寺と稱する）。卷上「古今勝迹三」『大正藏』第 51 冊、1094 頁。

<sup>9</sup> 『古清涼傳』卷下、『大正藏』第 51 冊、1098 頁以下。

また同じく高宗の儀鳳元年（676）のこととして、以下の有名な故事が伝えられている<sup>10</sup>。罽賓國の佛陀波利（Buddhapāli）がはるばる文殊の靈場たる五臺山に參詣し、五臺の山容を遙拜して、感激のあまり涙に噎んでいたところ、一人の老人が現れ、インドの言葉で何をしに來たかと尋ねた。佛陀波利が、文殊菩薩を禮拜するためにインドからやって來たというと、老人は「佛頂尊勝陀羅尼經」を持ってきたかと問う。罪深い衆生にみち、出家すらも過ちを犯すこの國に、罪を除く祕方たる「佛頂神呪」をもたらしただけでなければ、ここに來た意味はない。いくら文殊に會ったとて、何を識り得よう。よろしくふたたび西國に歸って、この經を取り、この國に流傳せしめるがよろしかろうというのである。そこで佛陀波利はインドに歸って、「佛頂尊勝陀羅尼」を持って歸ったと。この陀羅尼が中國に傳わった際の一傳説である。

ともあれ唐代以降、五臺山には續々として寺院が建立され、文殊の道場としての地位は不動のものとなっていく。それにつれて中國周邊諸國からも一層多くの巡禮者を惹き付けることとなる。

吐蕃は長慶四年（824）、使者を遣わして五臺山圖を求めたことが諸書に記録されている<sup>11</sup>。この時、吐蕃の請願は靈武節度使たる李進誠から朝廷に奏上されている。天德軍防禦使であった李進誠は、長慶二年（822）正月庚子、靈州刺史を兼ね、朔方、靈、鹽、定遠城等州節度使となっているが<sup>12</sup>、この地域はそれまで唐と吐蕃がしばしば干戈を交える最前線であった。しかし長慶元、二年（821-822）に長安及びラサで兩國の會盟が行われたことにより、久しぶりの平和がおとづれていた。吐蕃が五臺山圖を求めたのには、こうした兩國間の平和條約締結とそれに伴う停戦が背景にある。

ところでチベットの史書『バシエ』（sBa'-bshed）<sup>13</sup>によれば、吐蕃は贊普メ・ア

<sup>10</sup> 『佛頂尊勝陀羅尼經』序（『大正藏』第19冊、349頁）、『續古今譯經圖紀』（『大正藏』第55冊、369頁）、『宋高僧傳』卷第二「唐五臺山佛陀波利傳」（『大正藏』第50冊、717頁）等。

<sup>11</sup> 『舊唐書』卷十七上「（九月）甲子吐蕃遣使求五臺山圖」（中華書局評點本、512頁）、同卷一九六下「四年九月遣使求五臺山圖」（同上、5266頁）、『唐會要』卷九十七「四年遣使來求五臺山圖」（上海古籍出版社評點本、1981年、2060頁）、『冊府元龜』卷九百九十九「穆宗長慶四年九月甲子、靈武節度使李進誠奏吐蕃遣使求五臺山圖。山在代州、多浮圖之跡、西戎尚此教、故來求之」（中華書局影宋本、1989年、4041頁）、『太平寰宇記』卷一八五「（長慶）四年吐蕃遣使乞五臺山圖」（中華書局、中國古代地理總志叢刊本、2007年、3544頁）。

<sup>12</sup> 『舊唐書』卷十六、中華書局評點本、484頁。

<sup>13</sup> 比較的参照しやすい原文は Rolf Stein (ed.), *Une chronique ancienne de bSam-yaś: sBa-bžed*, Paris, 1961; また『巴協（sBa-bzhed）』北京：民族出版社、1980年。津曲眞一「『バシエ』訳註（1）」（『四天王寺大學紀要』第50號、2010年、429-462頁）は R.Stein の公刊した寫本を底本とし、全書92頁のうち15頁までのテキストに譯註を施したものであるが、詳細な注釋が極めて有用、續刊が待たれる。

クツォム (Mes Ag-tshoms、在位 712-755) の末年、中國では玄宗の時代に、バ・サンシ ('Ba' sang-shi) 等五名を求法のため中國に派遣したことが伝えられている<sup>14</sup>。またサンシはチソンデツェン (Khri-srong lde-tsan、在位 755-797) の時代にも中國に來たり、五臺山 (mgo-de'u-shan<sup>15</sup>) に參詣して歸國した後、サムイェに五臺山に模って寺院 (Nang lha khang) を建立したという<sup>16</sup>。『バシエ』の原本は吐蕃時代八世紀の史實を伝えるものと考えられているが、現在に傳わるテキストは大なり小なり後世の手が入っているため、五臺山に關する傳承が果たして事實に基づくものか、或いは後世の附加であるかは俄に決定しがたい。八世紀、五臺山は着実に隆盛に向かっているが、なお絶頂期とは言えない。またすでによく知られているように、中國からチベットに入った佛教は頓悟禪を主とするもので、『バシエ』にも益州の金和尚 (無相) との關係が強調されている。したがって時代からすれば全く不可能ではないが、現在のところ筆者は、この傳承が後世の附加であろうとする考えに傾いている。しかし少なくとも長慶四年 (824) に五臺山圖を求めた頃には、吐蕃では五臺山信仰がかなり廣まっていたことは推測できる<sup>17</sup>。

やや後の五代後唐の初期、コータン (于闐) から來た僧も莊宗の歡迎を受け、五臺山を參詣しており<sup>18</sup>、十世紀になると五臺山の名聲は廣く西域に及んだことが分かる。

わが國では靈仙三藏 (759?-827?) をはじめとして、圓仁 (794-864)、裔然 (938-1016)、成尋 (1011-1081) など多くの高僧が五臺山に詣でており、とくに裔然は洛西の愛宕山を五臺山に見立てて、嵯峨清涼寺の建立を發願した<sup>19</sup>。

朝鮮の佛教は當然ながら日本よりさらに早く五臺山と關わりを持った。唐の貞

<sup>14</sup>Rolf Stein, *Une chronique*, p.7, ll.11-12. それに對し、チベット新發見とされる異本『バシエ』では、この使節團は三十名からなる大規模なものだったとされる。Pasang Wangdu and Hildegard Diemberger, *dBa' bzhed, The Royal Narrative Concerning the Bringing of the Buddha's Doctrine to Tibet*, Wien, 2000, p.48.

<sup>15</sup>また mgo-rde'u-shan と書く。ともに五臺山の音寫。

<sup>16</sup>R.Stein, *Une chronique*, p.22, ll.2-4. C.Beckwith, "The Revolt of 755 in Tibet", in Ernst Steinkellrer and Helmut Tauscher (eds.), *Contributions on Tibetan languag, history and culture* (=Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, H.10), Wien, 1983, p.13, note 40; id., "The Tibetans in the Ordos and North China: Considerations on the Role of the Tibetan Empire in World History", in C.I. Beckwith (ed.), *Silver on Lapis*, Bloomington: The Tibet Society, 1987, p.9-10, note 30 を参照。

<sup>17</sup>チベット僧の五臺山 (Tib. Ri-bo rtse-nga) 巡禮は後世一層頻繁になったことと思われ、例えば『青史』(Deb-ther sngon-po) 等にも關係記事が散見するが、個々の時代を確定するのが難しいこともあり、ここには擧げない。

<sup>18</sup>『新五代史』卷十四「有胡僧自于闐來、莊宗率皇后及諸子迎拜之。僧遊五臺山、遣中使供頓、所至傾動城邑。」中華書局評點本、144 頁。

<sup>19</sup>裔然は清涼寺の建立を見ることなく長和五年 (1016) に示寂したが、同年その齋し歸った釋迦如來像が弟子の盛算によって棲霞寺内の釋迦堂に安置され、敕許により五臺山清涼寺と稱した。

觀十二年（638）<sup>20</sup>、新羅から入唐した慈藏法師は佛教興隆に大きな役割を果たした高僧である。彼は在唐中に五臺山に登って文殊の靈驗を受けたとされ、五臺山から齎した佛舍利を慶州の皇龍寺九層塔に安置したといい<sup>21</sup>、また江原道にある五臺山もその慈藏によって開かれた。

さて中國の西陲に位置する敦煌は、他にまして佛教の榮えた土地であったことは周知の所である。ここは西方からの巡禮者の經由地であったばかりでなく、歸義軍節度使をはじめ多くの僧俗住民が五臺山を讃仰したために、莫高窟の壁畫や藏經洞發見の寫卷には五臺山に關する豊富な史料が残されている。莫高窟の壁畫にはしばしば「五臺山圖」が描かれる<sup>22</sup>ほか、敦煌遺書中には「五臺山讚」や「五臺山曲子」、さらに「往五臺山行記」とも稱すべき五臺山への巡禮行を記録したものがあ<sup>23</sup>。最後の「往五臺山行記」の一類としては、これまで P3973、P4648、S397 が知られており<sup>24</sup>、すべて日を逐って行程と出來事とを記録した文獻であり、いまここで扱う《驛程記》と非常に近い性質をもっている。當然、詳しく比較して論ずべき材料である。ほかにも五臺山關連の敦煌文獻としては、地誌類に屬する S529「諸山聖迹志」、P2977「五臺山志殘卷」があり、また五臺山への巡禮行に關わる文獻として P3931「印度普化大師游五臺山啓文」、P.tib.849「梵藏對照詞彙跋」が注意される<sup>25</sup>。

さて日中戦争の最中に五臺山を調査した日比野丈夫と小野勝年は、その調査報告ともいべき著作『五臺山』において、五臺山に至る巡禮路として、當時の北京からの巡禮路を紹介したあと、歴史をさかのぼり、「むかし、長安や洛陽方面に都のあった時代には、山西省の南から太原を通過するコースが盛んに利用されたであろう。北京に都が奠められるようになってからは、河北省や太行山脈を横斷

<sup>20</sup>『續高僧傳』卷二十四「唐新羅國大僧統釋慈藏傳」による。『三國遺事』卷三によれば貞觀十年。

<sup>21</sup>『三國遺事』卷三「皇龍寺九層塔」

<sup>22</sup>五臺山圖は莫高窟には、最も壯麗な第 61 窟のそれをはじめ、第 9、144、159、222、237、361 窟に見られる。61 窟の壁畫については、宿白「敦煌莫高窟中的『五臺山圖』」『文物參考資料』2-5 (1951)、日比野丈夫「敦煌の五臺山圖について」『佛教藝術』34 (1958) 75-86 頁があり、趙聲良「莫高窟第 61 窟五臺山圖研究」『敦煌研究』1993 年第 4 期、88-107 頁がある。

<sup>23</sup>杜斗城『敦煌五臺山文獻』（太原：山西人民出版社、1991 年）は五臺山關連の敦煌文獻を彙輯したもので、便利である。

<sup>24</sup>鄭炳林『敦煌地理文書彙輯校注』（1989 年、蘭州：甘肅人民出版社）、上掲杜斗城『敦煌五臺山文獻』、董志翹「敦煌文獻中之《往五臺山巡禮記》——兼談日僧圓仁的《入唐求法巡禮行記》及日記的起源」項楚・鄭阿財主編『新世紀敦煌學論集』（2003 年、成都：巴蜀書社）666-703 頁に録文が収録され、また日比野丈夫「地理書」『講座敦煌』五「敦煌漢文文獻」（1992 年、東京：大東出版社）351-352 頁にも簡単な言及がある。ただしそれぞれ目的の相違から採録する文獻に若干の出入りがある。

<sup>25</sup>後二種の文獻はともにインド僧の五臺山參詣に關係するもので、釋迦蜜多羅や佛陀波利の後にインドから五臺山に參詣する僧侶の少なくなかったことを想像させる。

する道に、巡禮の杖をひくものが續いたのである。北方から大同を経て入山するコースは、主として蒙古人や満州人、はたまた西藏や青海からはるばる聖地を訪れる人々の巡禮路なのである<sup>26</sup>といい、また「更に、山麓に近づけば、四つの道が通じている。これを普通、東西南北の四道と呼んでいる」と云い、これらのルートを解説している。彼らが辿ったのは繁峙縣城を經由する北道で、他の三ルートは河北の阜平縣から龍泉關をぬける東道、太原府を北上、忻城を經由して五臺縣城に至る南道、そして雁門、代州を通ってくる西道があった<sup>27</sup>。

上に觸れた敦煌寫本中の3種の「往五臺山行記」についていえば、すべて首尾を缺く斷簡であるが、それぞれ巡禮がいかなるルートを取ったかを知る上で貴重な材料である。

P3973はわずか6行しか留めないが、戊寅年（918 或いは 978 年）に沙州を出發し、二月二十日に五臺山に到着した巡禮行の記録らしく、代州、雁門、忻州の地名が見える。また「辛卯歲十一月回路到□…」の語句が見えるが、この年は戊寅年から十三年が経過しており、二つの年次にどういう関係があるのか不明である。代州→雁門→忻州のルートをとすれば、雁門の位置に疑問が残る<sup>28</sup>。いずれにせよこの路程は、四道のうち西道を通して五臺山に入り、南道を經由して太原方面に抜けたものと推測される。

次いでP4648には、懷州から澤州、潞州を経て太原に至るまでの行程が記されており、おそらくこれは南道を通して五臺山に向かう途上の記録であったと思われる。

S397は太原府の大安寺について詳しく記した後、北京（すなわち太原）を出立して五月二十一日に白楊店、二十二日に大于店、二十三日に忻州の南の趙家店、二十四日に定襄縣、二十五日に臺山南門建安尼院に宿泊と、日を逐って宿驛を記録した後、二十六日に佛光寺に至り翌日、翌々日と參詣に日を費やし、二十九日に佛光寺を離れて聖壽寺に至り、更に福聖寺に着いたところまでが記録されている。この殘巻に見える大安寺の三學院は、『宋高僧傳』の「晉太原永和三學院息塵傳」によれば後唐の長興二年（931）に創建されたものであるため、この行記はそれ以後のものと分かる<sup>29</sup>が、太原經由の南道を通っていることが注意される。

<sup>26</sup> 日比野・小野『五臺山』東洋文庫 593 新版、1995 年、東京：平凡社刊、179-180 頁。ちなみに本書の初版は昭和十七年、東京：座右寶刊行會刊。

<sup>27</sup> 同上、180-181 頁。また李俊堂「五臺山道路小議」『五臺山研究』1986 年第 4 期（総第 5 期）、42 頁。

<sup>28</sup> 鄭炳林も氣になったと見え、注を附して唐末五代の時期には雁門の位置に變動があったか、雁門縣の東陘關を指しているのであろうとする。鄭炳林上掲書、308 頁、注 2。雁門縣には西陘關と東陘關の二關があるが、一般に雁門とは西陘關をいう。

<sup>29</sup> 鄭炳林上掲書、313 頁、注 2。

数少ないこれだけの例から速断することは軽率の誹りを免れないが、これらが敦煌から五臺山に参詣した巡禮の手記であるとするなら、その行程が南道或いは西道に限られ、北道及び東道が現れないことは、地理的位置から極く自然なように思われる。

### 三、歴史地理的観察

では《驛程記》はどうであろうか。この断簡には某年の八月十六日に谷南口に宿泊して以降、九月十八日雁門關北口驛に宿るまでの行程がごく簡潔に記録されている。その辿った道筋は、谷南口→(某地)→西受降城→西城→四曲堡→吳懷堡→天德軍→麥泊→曲河→中受降城→神山關→雲迦關→長平驛→寧人驛→子河驛→振武→長慶驛→靜邊軍→紇藥驛→平番驛→天寧驛→雁門關北口驛となり、いわゆる河套<sup>オールドス</sup>の外縁を西から東に向かい、やがて黄河を離れ南下して雁門關に至るルートである。目的地は疑いなく五臺山であり、いわゆる西道を取ったものと考えられる。とすればこの断簡は敦煌の「往五臺山行記」にもう一つ貴重な材料を追加することになるわけである。上に見た3種の断簡では、P3973がやはり西道を経由したものらしいが、殘缺が甚だしいために、路程が明瞭でない。それに比べて《驛程記》には20以上の經由地が詳細に記録されている。そのうち驛亭の名稱などはほとんど史乗に見えないもので、歴史地理の知識を補うものとして貴重である。

いまこれらの地名のうち、史料に見えるものは西受降城、天德軍、中受降城、雲迦關、寧人驛、靜邊軍である。いまそれらを含めて簡単に一行の旅程を辿ってみよう。

唐代の受降城の建置は中宗の景龍二年(708)三月、張仁愿をして黄河の北岸に西、中、東の三受降城を築き、相呼應して突厥の南寇を防いだことに始まる。それ以前、唐の朔方軍と突厥は黄河を境界として相對峙していた。北岸には突厥の拂雲祠があり、突厥が入寇するときには、先ずここに詣でて戦勝を祈願し、兼ねて兵馬を養い、結氷するのを待って渡河する習わしであった。この時ちょうど突厥のカガン默啜が衆を率いて娑葛(テュルギシュの族長)を征討するため西に向かったため、張仁愿はその機に乗じて、ここに三受降城を築くことに成功した。拂雲祠のあった所を中受降城とし、東西受降城はそれぞれ中受降城から四百里を隔てていた<sup>30</sup>。

<sup>30</sup>『通典』卷第一百九十八「景龍二年三月、張仁愿於河北築三受降城。先是朔方軍北與突厥以河為界、河北岸有拂雲祠、突厥將入寇、必先詣祠祭酌求福、因牧馬料兵、候冰合渡河。時默啜盡衆西擊娑葛、仁愿乘虛奪取漠南之地、築三城、首尾相應、絕其南寇之路。留年滿兵助成其功。以拂雲祠為中城、與東西相去各四百里、皆據津濟、遥相應接。」中華書局評點本、1988年、5438頁。ちなみ



八月十八日に西受降城を出た一行は、その夜、“西城”で休息した。『元和郡縣圖志』に「西城、九原郡北黃河外八十里、景龍中韓公張仁愿置」<sup>31</sup>とあるが、これは西受降城を指すものであるから、ここにいう西城ではあり得ない。おそらく何か古代の城址か何かで、その片隅にかろうじて一夜を過ごすことが出来たものと思われる。

天德軍の位置は何度か變遷している。天寶八載（749）三月、朔方節度使の張齊丘が中受降城の北に横塞城を築いた<sup>32</sup>。朝廷ではここに安北都護府を置き、郭子儀をその任に當て、左衛大將軍に拜した<sup>33</sup>。ところが天寶十二載（753）に至って、當時の朔方節度使安思順が奏上して横塞城を廢し、大同川の西に新たに築城し、ここに軍を置くことを請うたので、玄宗はこれに大安軍という名を賜った<sup>34</sup>。十四載に築城が成り、ここに大安軍が成立したが、乾元年間（758-760）に至って、安の字を嫌い、これを天德軍と改稱した。しかし住民が少ないため、暫時、部隊は西南へ三里の永清柵に移動し、治所を西受降城に置いた。その後、（西受降城は）しばしば河水の浸蝕に悩まされたが、元和八年（813）ついに黄河の氾濫によって城の南面が崩壊してしまった。その修理には莫大な費用がかかるために、天德軍を（大同川の）舊城に移動させることにした。そもそも大同川の天德軍は當初人口も少なく、数少ない住民も室韋や党項の侵掠を避けて山谷に逃れたりしたために、その經營がうまく行かなかったのだが、今回の新城修築に当たっては三萬餘家をここに移したために、やがて遠近から人びとも集まり、邊軍も勢いづき、人びとも安心して暮らせるようになった<sup>35</sup>。天德軍の舊城は西受降城の東南東一百八十里に位置する<sup>36</sup>。その後、天德軍の位置に更なる變動があったか否かは明かではないが、『驛程記』の行程を見る限り、大體この位置にあったと考えてよいのではなかろうか<sup>37</sup>。一行は西受降城を發ってから四日目で天德軍に着き、天德軍を出發して三日目に中受降城に着いている。西受降城から中受降城の距離が四百里とすれば、単純計算では西受降城から天德軍まで一百八十里、天德軍から中受降城までが二百二十里となって、それぞれの所用日数が不均衡なようにも思われるが、天候や

に新舊『唐書』は張仁愿の名を張仁亶に作る。一説に本名仁亶で、のち仁愿に改めたともという。

<sup>31</sup> 卷四、中華書局、中國古代地理總志叢刊本、1983年、92頁。

<sup>32</sup> 『舊唐書』卷九玄宗紀、評點本、222頁。

<sup>33</sup> 『舊唐書』卷一百二十郭子儀傳、評點本、2449頁。

<sup>34</sup> 大安軍は『通鑑』では天安軍に作る。

<sup>35</sup> この個所、天德軍の變遷は『元和郡縣圖志』卷四の説くところに據る。中華書局本、113頁以下。

<sup>36</sup> 『元和郡縣圖志』卷四に引く李吉甫の上奏文。中華書局本、114頁。

<sup>37</sup> 『遼史』卷四十一地理志五、天德軍の條に「天德軍本中受降城、唐開元中廢横塞軍、置天安軍於大同川。乾元中改天德軍、移永濟柵。今治是也」（評點本、509頁）とある。永濟柵は永清柵に同じ。とすれば天德軍は遼代にも大同川にあったことが分かる

道路事情にも由ることであろうから、深く追究するには及ぶまい。ちなみに後世、天徳軍はやがてこの近邊にあって最大の城市に發展し、その名は廣く西方にも傳わった。それは元朝期にマルコ・ポーロがここを訪れ、この地の王がプレスター・ジョンの末裔で、住民の多くがキリスト教徒であると紹介したからである。マルコの書にテンドウク (Tenduc) と書かれた土地につき、嘗てヨーロッパの東洋學ではその地名の考證に多くの精力が注がれたが、ユリウス・クラプロート (Julius Klaproth) によりマルコのテンドウクが即ち中國史上の天徳軍であることが解明され<sup>38</sup>、現在ではこれが定説となっている。

この時代においても天徳軍はこの地域最大の都市であったと見え、一行はここに十一晩ものあいだ逗留して、その間色々な饗應を受けたらしい。長旅の疲れを十分に癒やした一行は、九月三日に天徳軍を出發、五日に中受降城に安着。ここでは一泊しただけで道を急ぎ、六日に神山關に宿った後、七日の夜に雲伽關に到着した。雲伽關は單于大都護府管下の金河縣にある<sup>39</sup>。振武節度使の治所はここにあった<sup>40</sup>。太和四年 (830)、振武軍節度使李泳の上表にもとづき、ここに雲伽關を修築し、鎮守の兵千名を配置したのがその始まりである<sup>41</sup>。開成五年 (840) キルギスが回鶻の都城カラバルガスンを陥落させたあとの混亂のなか、回鶻の殘黨がカガンに立てた烏介特勤が南下して天徳軍を攻撃した。その時、邊境の住民が回鶻の侵掠を恐れたため、振武節度使の劉沔をこの雲伽關に駐屯させたことがあった<sup>42</sup>。雲伽關は天徳軍からは相當な距離があるので、直接に回鶻軍と對峙したのではなく、あくまで住民の安全確保がその目的であったと思われる。注意すべきは、一行が黄河沿いに東受降城へは行かず、黄河から離れ、眞っ直ぐに東行して振武軍に向かっている点であり、目的地が五臺山であれば、當然このコースを辿るべきものである。一行は雲伽關に二泊した。

雲伽關を九月九日に出立、長平驛、寧人驛、子河驛を経て、十二日に振武軍の所在地である單于都護府の府城に到着した。今日の内モンゴル自治區和林格爾<sup>ホリソグ</sup>の地である。そこからさらに長慶驛を経て、十四日には靜邊軍で宿泊している。

靜邊軍は『元和郡縣圖志』單于都護府の「八到」に「東南至河界靜邊軍一百二

<sup>38</sup> Julius Klaproth, "Sur les pays de Tenduc ou Tenduch de Marco Polo", *Journal Asiatique*, tome 9, 1826, pp.299-306.

<sup>39</sup> 『新唐書』卷三十七地理志一、評點本、976頁。

<sup>40</sup> 『元和郡縣圖志』卷四「單于大都護府、今爲振武節度使理所。」中華書局本、107頁。

<sup>41</sup> 『舊唐書』卷十七文宗紀下「振武置雲伽關、加鎮兵千人」、評點本、538頁。『冊府元龜』卷四百十「李泳爲振武軍節度使、太和四年七月上言、先管内修雲伽關、畢功并進畫圖一軸、又奏差兵馬一千人、赴雲伽關守」、中華書局影明刻本、1960年、4876頁。資料により迦と伽の文字に異同があるが、敢えて統一することをしない。

<sup>42</sup> 『資治通鑑』卷二四六、中華書局評點本、1956年、7947頁。

十里」と記されている<sup>43</sup>。静邊軍は河東道雲州に屬しており、ここに河界とあるのがそのことを示している。ここまできるともう現在の山西省の境域に入ったことになる。一行は百二十里を二日で行ったわけだが、一日六十里のスピードは平均的なものと思われる。ちなみに静邊軍は王忠嗣（706-750）が築いたものという伝えもあり<sup>44</sup>、もしそうなら王忠嗣が河東節度使であった開元二十八、九（740-741）の頃<sup>45</sup>であろう。天寶十四載（755）、安祿山が擧兵した際、その征討を命ぜられた朔方節度使郭子儀は、東に向かい、單于府から出兵し、先ずこの静邊軍を確保している<sup>46</sup>。静邊軍はこの近邊における軍事上の要衝であった。

更に東に向かった一行は 紇藥驛、平番驛、天寧驛を経て、十八日、鴈門關北口に着き、その驛亭に宿った。寫本は翌日十九日の日付を書いたところで切斷されているが、この日に鴈門縣城に入ったことはまず間違いない。一行の視界には五臺山の聖境が映じていたことであろう。

以上、簡単に西受降城から鴈門までの一行の行程を見た。では一行は敦煌から西受降城までは、どのようなルートを通ってきたのであろうか。寫本の最初に谷南口という地名が見えることからすると、どうも陰山を越えてきたものであるらしい。靈州から黄河の外縁を通ってきたとも考えられなくはないが、このルートには谷南口というような地形があり得ると思えず、またもしこのルートであれば、必ずしも西受降城に行く必要がない。豊州に出て、そこから天德軍へ向かうことが可能だからである。賈耽の『道里記』に記される四夷に通じる七つの道のうち、第四は中受降城から回鶻に入るいわゆる回鶻道であり、その道程を「中受降城正北如東八十里呼延谷、谷南口呼延柵、谷北口有歸唐柵、車道也。入回鶻使所經」と言い<sup>47</sup>、これが回鶻に使いする使者が用いる大道であって、車も通行可能であったことを記している。《驛程記》の一行が通ったのはもちろんこの大道ではなく、西方から谷沿いに西受降城へ出てくる別の道である。しかし『道里記』に谷南口という表現の用いられているのは注意してよい。そもそも陰山越えという点では、賈耽の回鶻道も《驛程記》の通った道も、ほぼ同様の地形であった筈であり、一行が宿った谷南口はまさに陰山の谷間を経由したことを暗示している。この道は回鶻道の別ルートだったと言っても好いかもしいない。一行は恐らく肅州あたりからエチナ河に沿って北行し、居延澤に至って東に向きを變え、ゴビを渡ってきたものであろう。

<sup>43</sup> 『元和郡縣圖志』卷四、中華書局本、108頁。

<sup>44</sup> [明] 嚴衍『資治通鑑補』卷二百十七「據舊史静邊軍當在單于府東北、王忠嗣鎮河東所築也。」

<sup>45</sup> 吳廷燮『唐方鎮年表』卷四、中華書局二十四史研究資料叢刊本、1980年、410頁。

<sup>46</sup> 『舊唐書』卷一百二十郭子儀傳、評點本、3449頁。

<sup>47</sup> 『新唐書』卷四十三下地理志七下、評點本、1148頁。

## 小結

P4648 や S397 では「某家」に宿泊したり、或いは寺院に宿を借りる場合がほとんどで、また P4648 ではしばしば投宿地で供養を受けていることから見ても、旅行者は僧侶（僧尼）であった可能性が高い。圓仁の『入唐求法巡禮行記』によれば、五臺山への参詣路には巡禮者のために一定の距離をおいて普通院という施設が設置され、宿と食事を提供していたらしい<sup>48</sup>。上記の「某家」は民間の旅宿であったであろうが、寺院に宿泊したと書いてある場合には、それらは實は普通院に数えられるべきものであったかもしれない。一方《驛程記》の記録者はほとんど公設の驛亭に宿泊しており<sup>49</sup>、天徳軍ではその南館に宿している。この旅行者たちはおそらく文中に見える沙州專使なのであり、歸義軍節度使が公式に派遣した使節だったと思われる。この寫本が比較的端嚴な文字で記されている點も、そのことを支持すると思われる。

沙州專使という語は、杜牧の「沙州專使押衙吳安正等二十九人授官制」<sup>50</sup>に見えるものが唯一例で、これは張議潮が河西を收復した後、長安に派遣した使節を指すものである。残念ながら沙州專使の用例はこれ以外に検出し得ないが、『冊府元龜』を見ると、その卷九百七十六に「天福三年（938）五月、回鶻朝貢使都督翟全福并肅州甘州專使僧等歸本國、賜鞍馬銀器繒帛有差」とあり<sup>51</sup>、肅州と甘州の專使が回鶻朝貢使とともに禮品を下賜された記録がある。外藩には例えば、契丹入朝使、回鶻朝貢使、回鶻入朝貢使、高麗朝貢使、于闐入朝使、于闐國進奉使、占城國進奉使など<sup>52</sup>、入朝使、朝貢使、進奉使などの呼稱を用い<sup>53</sup>、少なくとも名目的に

<sup>48</sup>圓仁『入唐求法巡禮行記』卷二、開成五年四月廿三日條「長有飯粥、不論僧俗、來集便宿、有飯即與、無飯不與。不妨僧俗赴宿、故曰普通院。」『大日本佛教全書』遊方傳叢書第一、1915年、東京：佛書刊行會、227頁。

<sup>49</sup>特に九月九日の朝、雲迦關を發程して以後は、長平驛（九日宿）、寧人驛（十日宿）、子河驛（十一日宿）、振武軍（十二日宿）、長慶驛（十三日夜）、靜邊軍（十四日宿）、紇藥驛（十五日宿）、平番驛（十六日宿）、天寧驛（十七日宿）、鴈門關北口驛（十八日宿）という風に、軍衛の設けがある以外は毎日驛亭に宿泊している。それに對して雲迦關に到着するまでは「驛宿」とは言わず、「谷南口宿」「西城歇」「四曲堡下宿」「吳懷堡宿」「麥泊食宿」「曲河宿」のような表現を用いていることからすれば、この邊には驛亭が完備していなかったことを窺わせる。堡に雨露をしのいだり、時には湖畔や河岸で露營したりしたものであろう。

<sup>50</sup>『樊川文集』卷十七。上海古籍出版社、中國古典文學叢書本、1978年、305頁。

<sup>51</sup>『冊府元龜』中華書局影宋本、3888頁。

<sup>52</sup>すべて『冊府元龜』に據る。

<sup>53</sup>唯一の例外はキルギス紇斯專使という場合で、李徳裕の「代劉沔與回鶻宰相書」（四部叢刊本『李文饒集』卷八）及び「論譯語人狀」（同卷十五）に見えている。これらは開成五年（840）キルギスがカラバルガスンに回鶻を撃破し、回鶻カガンに降嫁していた太和公主を送り届けてきた使者のことを指しており、朝貢して來たのではない。従って特使のような意味で專使の語を用いたものであろう。沙州專使、肅州專使、甘州專使というような場合とは意味合いが異なるように思われる。

は藩鎮として中原王朝の支配下にある地域の使節を専使と稱したものらしい。とすればこの沙州専使は歸義軍節度使の派遣した使節である。さらに云えば公的使節である以上、その最終目的地は中原王朝の朝廷でなければならず、本音はともかく形式上、五臺山參詣はあくまで副次的な行程であった。沙州の歸義軍節度使が派遣した公的使節であればこそ、天德軍で十日もの期間滞在し懇切な接待を受けたのである。使節のためにわざわざ打毬（馬球、ポロ）を催してくれたのは、最大級の歓迎であった<sup>54</sup>。

ただ遺憾とすべきは、寫本中にこの沙州専使の年代を決定すべき情報が欠如していることである。雲迦關の創設年である太和四年（830）を上限とすることは出来ても、地名等からそれ以上のことを言うのは難しい。当面、大雜把に歸義軍節度使の使節としておくしかない。

（作者は京都大學人文科學研究所教授）

---

<sup>54</sup>唐五代におけるポロの流行は朝野を擧げて頗る盛んであったことは、文獻に數多くの記載がある。李重申・李金梅・夏陽『中國馬球史』、甘肅教育出版社、2009年、65-69頁；王永平『遊戯、競技與娛樂——中古社會生活透視』、中華書局、2010年、132頁以下を参照。